

## 小さなことを少しずつ

高橋 充

### はじめに

小さな実践を続けてきた。それでも、積もればいささかのものである。研究会で発表させていただいたり、所属校の研究紀要に載せていただいたり、公募論文にまとめて小さな賞をもらったりした。泡のように消えた試みもあれば、ずっと続きそうなものもある。若い友人が発展させて形になっているうれしい試みもある。継続して取り組んできた工夫をいくつか紹介したい。目新しいことは何もないが、繰り返しに耐えうる、効果のある実践のつもりである。参考になればうれしい。

### 教材研究

教師1年目の春に、高校時代にお世話になった先生に、教材研究の大切さを言われた。「来年度はホームルーム担任になると思うが、今年度は時間もいくらかあるだろうし、徹底的に教材を研究することだ」ひざを乗り出すと、毎時間の教材の研究と全体的な教材研究の両面があると続けられた。

教材を十分理解して、授業の進め方を考えて、生徒への質問を用意して、予想される質問にも答えを準備して、必要であれば補助プリントを作ると、日々の研究は具体的であった。全体の研究というのはまず、英文法の勉強のしなおし、進学する生徒が多い学校なので大学の入試問題を解いてみるなどの受験英語の勉強、みんなわりにしていないけれども教科書を3年間分通読して研究すること、などといくらでもあった。次の時間の教材が、3年間の学習のなかでどのあたりに位置づけされているのかという視点をいつももつこと、ともつけ加えられた。

実際に言われたとおりに勉強してみて、大変だったが、その分とても鍛えられた。教科書や問題集を選ぶときなども3年間分をトータルに検討してから結論を出すようにした。30年前の、教師1年目の春

に言われたことを、今でも若い先生に受け売りしている。

### 音読と黙読

1年生を相手に授業を始めて1週間ぐらいすると、ある生徒が「先生、もっと読みたい」と叫んだ。授業中に読む英語の量が少ないというのだ。生徒に指摘されて反省した。中学生のころ、教科書を何度も読ませる先生のおかげで、苦手な英語を克服した覚えがある。さっそく音読の量を増やした。導入で読んで、説明を加えながら読んで、まとめに読んで、個々に読ませて、指名して読んでもらった。以来、1回の授業で教材を5～6回ほど大きな声で読むということが続けてきた。

黙読の時間も大切にしている。最後のまとめとしていっしょに音読する前に、その日の授業を思い出しながら読ませるのである。一心に読む静かな時間である。家庭でも復習として黙読することを勧めた。試験前にも繰り返し黙読することの効果を話した。できれば日本語を仲立ちにしないで、と加えたがこちらはなかなか難しいようだった。

若い先生たちはどれぐらい生徒に音読させるのだろうか。機器に頼るのもいいが、肉声で読んで聞かせて、大きな声で読ませることは大切なことである。

### グループ学習

学期に1回ぐらい、6～7時間の予定でグループ学習をやってきた。発展学習のつもりなので、教科書とは別の、生徒の英語の力に見合ったおもしろい読み物を準備する。小説だったり、小伝だったり、*National Geographic*からのサイエンスレポートだったりする。Erskine Calwellの*The Strawberry Season*など(*American Earth*所有)はどのクラスでも喜んでもらえた。

4~5人のグループが、自分たちのもっている英語の力と知識をフルに使って読んでいくのである。授業の始めの音読のあと、メンバーが2~3行ずつ担当して意味を確認していく。意見が合わないときは討論させる。初めは遠慮がちにしているがしだいに熱を帯びてくる。結論が出なかつたりわからなかつた部分は、授業後半の質疑応答の時間まで寄せておく。そのときに共通の問題としてクラス全員で相談するのである。最後は内容についてグループ内でQ and Aを行い理解を深める。

この学習は英作文にも使うことができる。グループで民話などを英訳させると熱心に取り組む。長期休業中の課題にすることもできる。ALTに添削してもらい、打ち直した英文を印刷し製本すると、いい思い出になる。

#### サイドリーダークラブ

生徒たちといっしょにクラブを作ったことがある。学校には出版社からサイドリーダーの見本がたくさん送られてくる。それを読んでいくクラブである。次々と、と言いたいところだが個人差があり、それぞれのペースで読んでいく。励ましがこつである。

とりあえず60冊ぐらいを選んだ。内容が多岐にわたるように配慮し、生徒の選択の幅を広げるようにする。読んでみてA、B、Cと難易度をつけて表紙に表示する。巻末に「私も読みました」という用紙を貼りつけて、読んだ人は名前とクラスと感想を書くことにする。校内で有名な、あこがれの先輩の名前や感想がこの用紙にあると、後輩は体験の共有に喜んだり励まされたりするらしい。書きたくなければ書かなくても、もちろんいい。

言い出しっぺだし、難易度をつける必要もあり、最初に読んで用紙に名前を書く。内容を把握しておく、アドバイスを与えるときに役にたつし、生徒が何を読むか迷っているときに助言できる。

結局、前任校にいる間、このクラブは9年ほど続いた。くたびれた本は、製本が趣味の教頭先生に補修していただいて、利用した。

#### Answer in English 100

基礎・基本が十分でない女子だけのクラスを担当したことがあった。「勉強は嫌いだ、英語は話せるようになりたい」というのが大方の意見だった。教

科書は難しいものではなかったが、生徒には負担で、会話の教材になりにくい。そこで自主教材を作成した。簡単な英語の質問を100用意し、Answer in English 100というタイトルの冊子にした。コミュニケーションの第一歩は「日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したり」(「学習指導要領」)することなので、そこから始めたのである。毎時間、5~6分ぐらい、一斉の練習のあと、生徒どうしが会話するのである。1年ぐらいの練習でそこそこの会話になる。

定期考査の範囲にして、英作文として出題もした。ALTとのインタビューテストでもこの質問を利用し、生徒は生まれて初めて1対1で外国の人と英語で話すことになる。生徒の感動は大きく、以後の学習の弾みになった。

この冊子をもとに、いろいろな先生が、学年やクラスのレベルによって質問を変えたり、新しい質問を加えたりして、内容を発展させていった。地域のいくつかの高等学校で、かつての同僚が今でも使ってくれている。うれしく、誇らしいことである。

#### Who Did What?

次に考えたのが、聞くことにやや重きを置いたWho Did What?というプラクティスである。次のような用紙を生徒に配る。

who	what	when	where	how/why

これは2人用だが、3人であれば3段になる。次のように段階的に行ってみた。

最初はJTEとALTが会話して、生徒はその内容をメモする。週末の予定や趣味のことをわかりやすく話せばいいと思う。

教科書のトピックを話題にしたり、新出単語を使ったりすれば、予習や復習にもなる。後々生徒が行うための会話のモデルなので、項目が多く埋まるような会話にすることが大切である。

慣れてきたら、生徒どうしに会話をさせてみる。いきなり話すのが難しければ、当番を決めて、あらかじめ原稿を作り、内容を覚えクラスで発表する。

必要があればまちがいなどを直してあげる。他の生徒は同じようにメモをとる。

進んで、ペアワークやグループワークとして行うこともできる。お互いが自分のことを話し、相手のことを聞き、さらに自分のことを話すというふうになればねらいどおりである。

日常会話は Q and A の連続と言える。用紙にあるような、who, what, when, where, how, why を使って相手に聞くことができること、それに答えることができることが、実践的ということではないだろうか。聞きまちがいがそのままになったりしないように、確認が必要である。Answer in English 100 による練習も生きてくる。

### Story Making

想像力と創造力を刺激する Story Making は少し難しい。自分のことを話せることと同様に、事物を説明することも英語習得には欠かせないステップではないだろうか。何枚かの絵や写真を与えて、説明させたり、さらには自由に物語を作らせれば、楽しい活動となる。

準備した絵をすべて使わせてもいいし、何枚かを選ばせて物語を作らせることもできる。個人でも、ペアでも、グループでもできる。選んだ絵が「城」「川」「雪」「少女」「猫」だとしたら、あなたはどんな物語を作りますか。学習事項を取り入れて、will を使うこと、とか、進行形を使うことなどという条件を与えると活動に広がりが出てくる。

絵は、生徒がかいたものを利用する方法がある。生徒は喜んで絵をかき、その分、熱心に参加する。雑誌などの写真を切り抜いて使うこともできる。

学習段階に応じて、4～5枚のやさしい絵から始め、しだいに、枚数を増やしていく方法もある。コンテストにしてクラス全員でおもしろい作品を選ぶと、生徒は競って取り組む。

このゲームは書く力を育てるためにも有効で、長期休業中などの課題として物語を作らせることができる。ALT の協力で添削してから生徒に返し、清書させればそのことが確認作業となる。

### 教育ゲーム

最終的には自分の意見を述べることができる生徒を育てたいと思う。簡単なことではないので、前の

段階として教育ゲームと呼ばれる次のような活動を行った。

- ① 困難な状況で、手元にある物をどのように活用して生き残るか、というシミュレーションゲームがある。飛行機が冬の山中で墜落した。パイロットはなくなったが、乗客は無事で、利用できるものが15品目ある。生き残るために、これらの品物に重要度にしたがって優先順位をつけなさい。
- ② 海に落ちかけている気球がある。政治家、芸術家、スポーツ選手、社員の4人が乗っている。3人であればなんとか目的地まで飛んで行ける。だれが犠牲になるべきか話し合いなさい。
- ③ 戦争が始まった。核シェルターがあり、さまざまな年齢や職業の11人がいるが、7人しか入れない。話し合っってその中から7人を選びなさい。

生徒の英語の力に見合った支援をして、できるだけ自分の言葉で話させることが大切である。ただただしくであっても生徒は懸命に話そうとする。ここまで来ればディベートまであと一歩である。

### おわりに・質より量

以上、生徒が楽しく取り組めるという視点で少しずつ行ってきた実践である。生徒の実態や学習段階に応じてアレンジすることが可能だし、必要なことでもある。

語学学習は質より量である。教科書を基本にしなから、奇をてらうことなく、日々前向きに、地道に取り組む必要がある。かといって、同じことばかりでは飽きてくるので、生徒の好奇心を刺激しながら、新しいものも取り入れる必要がある。力量の発揮のしどころである。

生徒が英語学習に興味をもち、4つの技能の獲得に励み、実践的なコミュニケーションが目ざせるような授業を、みんなで創造していきたい。

(秋田県立横手城南高等学校教頭)